

江戸中期の通人の装いを描いた『當世風俗通』

講師（日本服装史担当）福田博美

江戸時代も中期に入ると、上方の粋は江戸の通に移行し、不粋な武士よりも財力を得た町人が遊里で幅をきかせるようになった。また、その道に通じた男性は通人といわれ、この風俗は洒落本に多く描かれた。中でもここに紹介する安永二年（1773）刊『當世風俗通』（382.1-K）は、遊客息子株の姿態を頭髪から服装、携帯品、履物まで細かく説明し、さらに絵でもって記したものである。序末に金錦佐惠流識と記され、この著者は、恋川春町（1744—89）、朋誠堂喜三二（1735—1813）の両説があり、挿絵は前者の筆と伝えられる。

この本は、通人の装いを極上、上、中、下と位づけして描写したものであるが、本稿は、それらの服装史上の特色を求めて列挙したい。まず、極上之息子風では、「右の風俗をなさんと欲せはすへからくひとつに人品高かるへしと誠に至論也」と品性の高さを重んじ、袷着用の際は頭髪、上着から襦袢にまで品の良さを求めている。これは幕政の停滞を生じた田沼時代に在って、武士の人格を尊重したいとする藩士としての著者の理念と推察される。図1は、黒羽二重の紋付に、縞博多の帯をしめ、唐棧留（縞）の袷で正装しており、内には浅黄羽二重の襦袢と浅黄無垢、小紋無垢の下着を着たと記される。特に、裏付袷は、この時期からあらわれたもので、その上衣である肩衣は鯨の鬚を入れて一文字矢筈に仕立てた（図2）。夏には白晒の半袖の襦袢に、同質の下帷子を着し、上着も縮は紺に白染抜紋また芥葉縞などに紋を染めたもの、袷は袴に精好平の小棒筋または河越平、麻袷は通し小紋または霰小紋と、季節の別が地質や地色にみられる。染織上、縞や小紋が愛用されたのである。また、構成上では「或人の云く」の書き

出して、袴や下着に至る仕立ての心得が記される。例えば、衣類を縫うには表より裏はすべて五分（約1.5cm）狭く仕立て、裏のはみ出ることのない様に、と説いている。また上着の袖も七分（約2.1cm）程とし、あまり沢山出すのは下品であると記している。当代の裁縫書『絹布裁要』（宝暦十四、1764）『裁縫早手引』（享和三、1803）などには採寸・裁断の記載はあるが、この本にみる縫製法は見出されず裁縫指南書の役割も果すものである。

次に上之息子風は、高慢なりといえども、柔和で行き過ぎがないと説明した上で、極上之息子風同様、冬は緋縮緬または桃色縮緬に黒天鷲絨の半襟をつけ、黒羽二重紋付、縞縮緬などの小袖を着用したが、ここでは、その上に黒羽二重の五所紋の道服を着ている。帯は、博多縞の他、天鷲絨あるいは天鷲絨と浅黄縞の両面にしたのもあり、臍のあたりにさつとしめ、端をだらりとさげた。おさらばむすび、猫じゃらしと呼ばれる結び方で、



図1 極上之息子風(菅笠に袷着用)

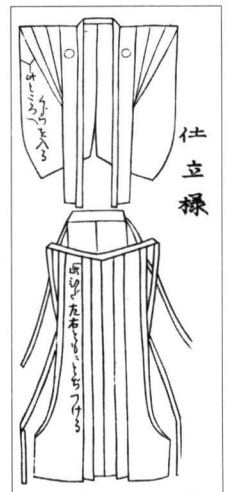


図2 袷の形態と仕立て

わずかに猫背ぎみになった。この姿は、中之息子風にもみられ、その風俗はもつての外の高慢と記される。小袖の裏はいつでも流行色の小納戸茶とした上之令子風に対して、「裏は小納戸ちゃに紅の額うら」とある。つまり、表に見える衿、褌、裾には小納戸茶、隠れる胴の部分には安価な紅絹を用いた額仕立を示す。これに関して、最初の文献とされる天明四年（1784）刊『¹⁾甲辰角雞卵』をさかのぼる資料として価値付けできる。

さらに、最も賤しい下之俠客風は、遠眼鏡で見れば唐更紗を売買する人と記される。上之令子風の小袖にみられた藍さび（赤みを帯びた藍色に染めた上布拵）まがいの単物の姿（図3）には、当時の下級町人が上級者の偽物を着用した様子がみられる。また、縮緬や金モールなどの丸げけ帯をゆるくしめて、横に広い烟草入を提げた。外観を厳めしく見えるように拵えたもので、広東縞・菖蒲革・縞天鷲絨・更紗染などの布帛や革で作られた。上之令子風では、煙管は鼻紙袋などに入れて、懐に納められたが、ここでは煙管も烟草入に入れ、根付で腰に提げた一つ提といわれるものである。この時期、懐中用から腰提げ用へ変化した背景に

は、下級町人の烟草入の流行が先行したといえる。さらに次の天明期（1781—89）以降、煙管筒と対になった烟草入の小型化が進む。そうした過渡期における特有の形態を描写した挿絵の効果を指摘したい。商業の発達と共に袋物商も出現し、京阪地方の商人が江戸を中心として次第に台頭した。町人の奢侈に対する規制のもと、彼等は烟草入や鼻紙袋などの目立たぬ所に贅を尽くした結果、袋物の発達を促したのである。

それから、附録²⁾ 異体之図と称する息子風の変化した身なりとして、縞琥珀の与作頭巾、黒縮緬の竹田頭巾、また加賀蓑、きんきん合羽などの図が記される。頭巾の流行もこの時期に多く、翌安永三年（1774）にはその着用を禁じた町触が²⁾ だ。最後に、時勢³⁾ 八体之図として、古来之本多、五分下、圓鬚、浪速、令兄、金魚、疫病、團七と称される本多⁴⁾ 騷の様子が描かれている。

安永四年（1775）に刊行された黄表紙の祖『金々先生栄華夢』には、吉原通いの姿として上之令子風に竹田頭巾をかぶり、品川通いには、中之息子風に与作頭巾を用い、深川雪中の姿は加賀蓑を取り入れた。文字の読めない人々でも、絵を理解することは可能であり、江戸町人の嗜好に合った金々先生風は、当時の流行や世相に大きく反映した。その原典が本書である。

なお、この本の後編として、当時の女性風俗を描いた『當世女風俗通』〔382.1-K〕が安永四年に出版された。著者である金錦先生は、「先に⁵⁾ 余當世風俗通⁶⁾ を著てより以来、（中略）通の通たる所以とんと分らず。只意気なる御仕成にして。女を見るに至ては。」と執筆の動機を述べ、美人の姿態、化粧法を記している。そして、両書を合せて、江戸時代中期の『男女風俗通』と称されるのである。



図3 疫病本多に結髪し、房楊枝を持つ俠客姿

註1) 遠藤武著 遠藤武著作集 第一巻 服飾編 文化出版局 1985 P.276

2) 高柳眞三・石井良助編 御觸書天明集成 岩波書店 1958 P.535